

かり つかい づき い せ ものがたり  
 狩の使1：おぼろ月（伊勢物語）



むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、かの伊勢の  
 斎宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」と言ひやれり  
 ければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩に出し立  
 ててやり、夕さはかへりつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいた  
 つきけり。

二日といふ夜、男、われて「あはむ」と言ふ。女もはた、いとあはじとも思  
 へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ぎねとある人なれば、遠くも  
 宿さず。女のねや近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男の  
 もとに来たりけり。男はた、寝られざりければ、外の方を見出してふせる  
 に、月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて人立てり。男、いとうれしく  
 て、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまでであるに、まだ何ごともか  
 たらはぬにかへりにけり。男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。

ろうどく  
 朗読

-2:03

ほんぶん せつめい  
 本文の説明

1: むかし、男ありけり。

2: その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、

3: かの伊勢の斎宮なりける人の親、

4: 「つねの使よりは、この人よくいたはれ」と言ひやれりければ、

5: 親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。

6: 朝には狩に出し立ててやり、

7: 夕さはかへりつつ、そこに来させけり。

8: かくて、ねむごろにいたつきけり。

9: 二日といふ夜、男、われて「あはむ」と言ふ。

10: 女もはた、いとあはじとも思へらず。

11: されど、人目しげければ、えあはず。

12: 使ぎねとある人なれば、遠くも宿さず。

13: 女のねや近くありければ、

14: 女、人をしづめて、

15: 子一つばかりに、男のもとに来たりけり。

16: 男はた、寝られざりければ、

17: 外の方を見出してふせるに、

18: 月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて人立てり。

19: 男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、

20: 子一つより丑三つまであるに、

21: まだ何ごともかたらはぬにかへりにけり。

22: 男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。

げんだいごやく  
現代語訳

むかし おとこ おとこ い せ くに かり つかい い い せ さいぐう ひと おや ししゃ  
昔、男がいた。その男が伊勢の国に狩の使として行ったところ、その伊勢の齋宮だった人の親が、「いつもの使者よりはこの  
ひと  
人によくしてあげなさい」と言ってやってあったので、(齋宮は、) 親の言うことだったので、大変 心をこめて世話をした。朝  
したく かり だ ゆうがた かえ こ てあつ めんどう  
には支度をして狩に出してやり、夕方は帰ってくるたびにそこに来させた。このようにして、手厚く面倒をみたのだった。

ふつかめ よる おとこ ところ みだ あ い おんな さいぐう ほう つよ あ おも  
その二日目の夜、男は、心が乱れて「逢おう」と言う。女(齋宮)の方もそれほど強く逢うまいと思っているわけではない。  
ひとめ おお あ おとこ ししゃ だいひょう ひと とお と  
しかし、人目が多いので、どうしても逢うことができない。(男は) 使者の代表にあたる人なので、遠いところに泊めてはいな  
おんな しんじよちか と おんな ひとびと ねしず ま ね ひと じぶん おとこ き おとこ  
い。女の寝所近くに泊まっていたので、女は人々が寝静まるのを待って、子一つの時分に、男のところに来たのだった。男もま  
ね そと ほう み よこ つぎ ひかり なか ちい どうじよ さき た ひと た  
た寝られなかったので、外の方を見ながら横になっていると、ぼんやりした月の光の中に、小さい童女を先に立たせて、人が立  
おとこ おも じぶん しんじよ おんな つ はい ね ひと うしみ とき なに かた  
っている。男はとてうれしく思って、自分の寝所に(女を)連れて入って、子一つから丑三つまで時がたったが、まだ何も語  
あ おんな かえ おとこ かな ね  
り合わないのに(女は)帰ってしまったのだった。男はとて悲しくて、寝なくなってしまうた。

[サイトについて](#) [使いかた](#) [ご意見・お問い合わせ](#)

copyright 2019 BUNGO-bun GO!